

江東区の伝統工芸 指物（さしもの）

指物とは、物差しで寸法を測ることを「差す」「指す」ということから、これより転じて板の寸法を測り、棒と板とをしっかりと組み合わせて、箱や器などの精巧な木工品を作る技術をいいます。

指物の歴史は古く、平安時代前期には朝廷・貴族・僧侶などの調度品を製作する職人がいました。その後、室町時代に入ると武家の調度品や茶道の道具類の需要が増えたことから、大工から分かれた専門の指物師が生まれました。

江戸では、京や大坂のような華やかな装飾を避けて、用材そのものを愛でる素朴な作風が好まれました、木地のみで仕上げたり、拭き漆など木地をいかした淡泊な着色を特徴としています。

現在、江東区指定無形文化財(工芸技術)「指物」保持者の山田一彦氏(号・三代目嘉丙)が伝統の技を伝えています。山田氏は茶の湯道具を得意としています。



花月棚 (かげつだな) 山田一彦製作



江戸千家十世名心庵宗雪(1946～)好みの棚物(たなもの)写しです。名は、家元にある「花月の間」にちなむといえます。

棚物は、茶席で亭主が茶をたてる点前畳(てまえだたみ、道具畳、亭主畳ともいう)にすえて、点前に際し茶道具を飾り置く棚の総称です。四畳半以上の広間に使い、それよりせまい小間には使いません。

畳に付く下の棚を地板、一番上の板を天板といいます。板は黄蘗(きはだ)で、柱は桑を用いています。木目をいかす拭き漆で仕上げた本品は、年数をへるごとに深いツヤが出て良い色合いになっています。

ほぞ組の見本

板や棒をつなぎ合わせるための技法です。製品に合わせて組み合わせを考え、ほぞ付き加工を施します。組み上がると継ぎ手が隠れて分からなくなります。見えない部分に手の込んだ技を駆使するところに、指物師の心意気がうかがえます。

■ 留隠し三枚接ぎ (とめかくしさんまいつぎ)

材は桑です。三枚接ぎは、組み合わさる部分が三枚になる手法です。これは、留隠しとして、ほぞ先を内部に収め、外から接ぎの状態を見えなくしています。



■ 肩付き片胴付き追入れ接ぎ (かたつきかたどうづきおいれつぎ)

材は楓です。接合面の片端に胴付きを設け、かつ上端から下げて肩付きとした手法です。

【追入れ】

木目を横切るようにほぞ穴を開ける方法です。

【胴付き】

ほぞ側の材がほぞ穴側の材と接する面や線をいいます。



■ 剣留ほぞ接ぎ (けんとめほぞつぎ)

材は桑です。先が剣先に似ています。飾り棚や茶箆筒の見付 (柱や框などの正面) に用いられます。



■ ローソクほぞ接ぎ (ろうそくほぞつぎ)

太い材は桐、細い材は桑です。飾り棚の棚板を貫通するほぞに用いられます。

